



カラー版 古典の花

枕草子・徒然草の花

カラー版 古典の花
枕草子・徒然草の花

昭和五十八年二月一日発行

著者 松田 修 ©

発行人 石原明太郎

発行所 (株)国際情報社

発売元 (有)光書房

〒150 東京都渋谷区東一―二八―六
電話〇三(四〇七)六一四六
振替 東京五―三六五四八

印刷所 (株)国光印刷

定価 一六〇〇円

© OSAMU MATSUDA

1983
Printed in Japan

松田 修 (まつだ・おさむ)

一九〇三年、山形県に生れる。東京大学農学部卒業。社団法人「日本植物友の会」会長。専攻は植物文化史。著書に『万葉植物新考』、『植物の旅』、『植物と伝説』、『花と文学』、『花ごよみ』、『植物世相史』、『花の文化史』、『古典植物辞典』、『秋の百花譜』、『冬の草木譜』など多数がある。
現住所／東京都世田谷区砧一―七―一二

カラー版 古典の花

枕草子・徒然草の花

文・松田 修

国際情報社

カラー版 古典の花

枕草子・徒然草の花

目次

すみれ	6	からあふひ	16	きく	26
つぼすみれ	6	くわんざう	18	りんどう	28
なでしこ	8	しもつけ	18	をみなへし	28
からなでしこ	8	しをん	20	われもかう	31
かきつばた	10	かまつか	20	をぎ	31
ゆふがほ	12	ぬかづき	22	すすき	32
あさがほ	12	ひさご	22	あし	34
はちす	14	ききやう	24	かるかや	35
はまゆふ	14	はぎ	24	かにひ	35
くれなる	16	くず	26		
木の花は		木本・竹笹類の部(一)			
うめ	38	ぼうた	46	うのはな	52
さくら	41	ふち	49	ゆ	54
もも	42	たちばな	50	きり	54
すもも	44	やまぶき	50	あふち	56
つつじ	44	なし	52		
草は		草本類の部(二)			
わらび	58	おにところ	76	あかぎ	93
せり	59	あかね	78	かたばみ	95
くちなはいちご	61	えび	79	あをつづら	95
よもぎ	61	うり	80	みみなぐさ	97
むらさき	62	やまある	80	め	97
なづな	62	みちしば	82	いたどり	98
おほね	65	あさち	82	おにわらび	99

索引
枕草子・徒然草の植物

え	くす	しきみ	いちご	からたち	たけ	ささ	かなもち	もみぢ	かへで	そばのき	ほほ	ごえふ	まつ	かしはぎ	さうぶ	しのぶぐさ	ひかげ	なぎ	おもだか	みづぶぶき	やへむぐら	あふひ	うきくさ	つきくさ	ひし
121	121	119	118	118	116	116	115	115	113	112	111	110	108	108	76	75	74	72	72	70	69	68	66	66	65
あまづら	やまもも	まゆみ	くるみ	くり	くれたけ	かはたけ	たく	あすはひのき	やまなし	ゆずりは	さかき	しひ	やまたちばな	ひ	あさ	ことなしぐさ	まめ	あさぎ	こだに	あやぶぐさ	いつまでぐさ	ますほのすすき	みくり	めなもみ	いね
129	128	128	128	127	126	126	125	125	124	124	123	123	122	122	92	92	90	90	89	88	88	86	86	85	
すはう	ちやうじ	ねずもちのき	すろ	やなぎ	むく	かつら	つるばみ	びらう	すぎ	ちん	むばら	やどりぎ	しらかし	つた	かりやす	も	ひるむしろ	こけ	まつたけ	やますげ	こも	しじらふぢ	いもがしら	しろうるり	
141 136	135 135	134 134	134 134	133 133	133 133	132 132	131 131	131 131	130 130						106 106	105 104	103 102	102 102	102 101	101 100					

はじめに

『枕草子』と『徒然草』は、いうまでもなくわが国の随筆文学の傑作である。『枕草子』は、平安中期の清少納言せいしょうなごんという才女のみずみずしい感覚と奇抜な着眼、垢抜けあかぬした機智で、人間と自然をとらえている。『徒然草』は、鎌倉末期という時代を生きた兼好法師かねよの作になり、その基調をなすのは仏教の無常観であるといわれているが、平安時代にはなかった新しい時代感覚で、美意識の広さと深さを展開しているところに大きな魅力がある。

古典文学では、登場する植物に大きなウエイトがかかっている。『枕草子』、『徒然草』においてももちろんである。しかしながら、この両随筆が今も各層に広く愛読され、研究や注釈書の数が多いにもかかわらず、権威ある人の著書においてすら、植物については誤った解釈がなされていることがしばしばである。また、その植物が作品の上でどのような役割を果たしているかなどについては、ほとんど触れているものがない。

私は植物文化史を専攻とする立場から、古典に登場する植物に光を当てることに努力してきたが、いまた、『枕草子・徒然草の花』において、その植物について吟味し、解説することに努めた。本書は、「草の花は」「木の花は」「草は」「花の木ならぬは」の四つのブロックから構成されている。四つのタイトルは、『枕草子』の段名が気に入ってそのまま頂戴したものであるが、それぞれ、花の美しい草本類、花の美しい木本類、花のそれほど目立たない草本類、花のそれほど目立たない木本類に分類したつもりである。

なお、底本として、岩波書店版の日本古典文学大系の『枕草子・紫式部日記』（池田亀鑑・岸上慎二・秋山虔校注）、同じく『方丈記・徒然草』（西尾実校注）を使わせていただいたので、最後に一言おこたわりしておく。

草の花は……
草本類の部(一)



〔徒然草〕

風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、
なれにし年月を思へば、あはれと聞きし
ことの葉ごとに忘れぬものから、我が世
の外になりゆくならひこそ、亡き人のわ
かれよりもまさりてかなしきものなれ。

されば、白き糸の染まん事を悲しび、
路のちまたのわかれん事をなげく人もあ
りけんかし。堀川院の百首の歌の中に、
むかし見し妹が鬚根は荒れにけり
つばなまじりの葦のみして
さびしきけしき、さる事侍りけん。

(二六段)

すみれ 堇

スミレ(すみれ科)

徒然草の「風も吹きあへず」(二六段)は、恋の趣を説いた
もので、兼好はその趣味論の立場から、いつも「待つべき楽
しみ」と「おもひでにしてしのお楽しみ」を唱え、恋におい
ても同じその趣を説いている。この一文の最後に「むかし見
し……」という歌をだし、初めはしんみりした調子の淋しい
景に、春の野のスミレをだしているのもいかにも巧みで、落
莫の感を抱かせている。

日本はこのスミレの王国で、多くの種類があり、古来春野
の景物として文学にも多く現れている。

つぼすみれ

壺堇

ツボスミレ(すみれ科)

日本にはスミレの種類が多いが、このツボスミレという名
が日本の文学に最初に現れているのは『万葉集』である。

このツボスミレについて『万葉代匠記』は、「すみれの花
には、下の方にまろくて、つぼのごとくなる所あれば、つぼ
すみれとはいふなり」といい、スミレの一名としている。ま
た牧野富太郎博士は『植物記』に、「ツボはその花がつぼめ
る形で、あたかも壺に似ているからツボスミレと解いている
が、私はすでに往時のある識者が言っているように、これは、
庭に生えているスミレの意であると思う。つまりツボスミレ
の場合のツボは、庭先につづいた野といったものである」と
述べられている。ツボスミレのツボについての解釈は異なっ
ても、要するにスミレの一名としていることに変わりはない。

しかし今日ツボスミレといっているのは、スミレが無茎種
なのに対して、ツボスミレは有茎種、スミレが葉が皮針形な
のに対してツボスミレは腎臓形卵状で、花はスミレが淡紫色
で、ツボスミレは白色のものをいう。

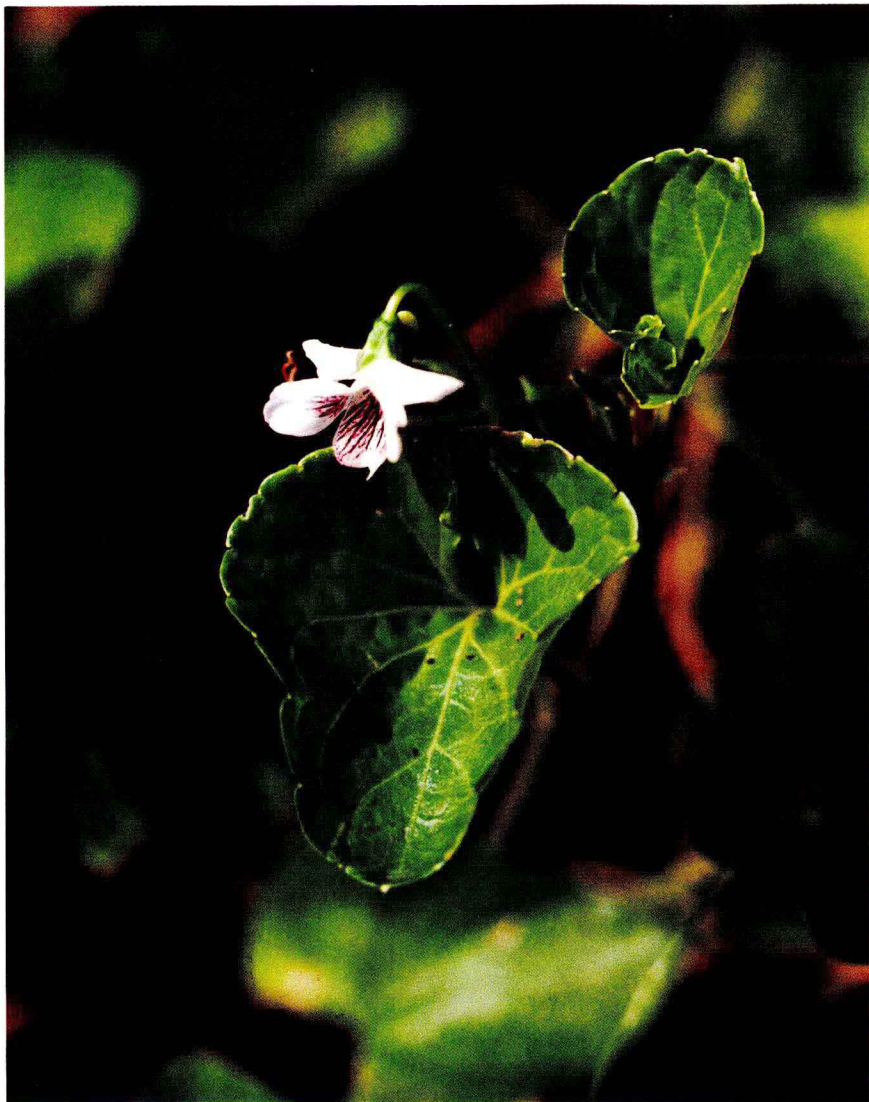
〔枕草子〕

草の花は……

……あさがほ。かるかや。菊。壺すみ
れ。

(六七段)

それなら枕草子に「壺すみれ」とあるものは、スミレの一名かそれともこのツボスミレのいずれかというところ、いずれとも解釈できるのであるが、しかしこれは名のごとく今のツボスミレを考えてさしつかえないような気がする。それは平安文学の襲（かぶ）の色目に、「葶」と「壺葶」と区別して、「葶」は表が紫、裏が薄紫で、「壺葶」は表紫、裏薄青の色目をいい、両者を区別しているからである。こうみると、ツボスミレは、今のツボスミレを指したものと考えられる。



つぼすみれ



なでしこ

なでしこ 撫子 ナデシコ 一名カワラナデシコ (なでしこ科)

ナデシコは、枕草子の「草の花は」(六七段)の冠頭にそれをあげているのをも、当時愛されていた草花の一つであったことが分かる。また、じかにそれを見て美しいものだけに、「絵にかきおとりするもの」(一一六段)にもあるように、

絵に画くと見劣りがするというのも実感であろう。
ナデシコは、山上憶良やまのうえのおよむの秋の七草の一つに数えられ、その伝統は平安・鎌倉と引継がれていることは、徒然草にもそれをあげているのをもみてもわかる。

各地の山野に広く自生し、緑色の線形の葉をつけて、夏から秋にかけて咲く、花弁が五裂した淡紅色の花は、いかにも優美で、また雅味がある。

からなでしこ 唐撫子 セキチク(なでしこ科)

枕草子の「草の花は」(六七段)の最初に、ナデシコ・カラナデシコを出しているのは、当時の人々にこれらの花がもてはやされていたのであろう。また「いみじう暑き昼中に」(一九二段)の一文は、そんな猛烈に暑い日中に、真紅の薄様の紙を、カラナデシコのすばらしく咲きほこっている切花に結びつけて届けられたこの消息は、先方の人もこの暑さを認めて書いてよこしたのだと思うにつけても誠心のほどが思われるといった意である。

カラナデシコの名は、唐(中国)から来たナデシコの意味で、これは今名セキチクの異名である。このセキチクは、もとは中国産で、日本へは平安時代に渡来した草花である。多年草で、高さ一五〜四〇センチ内外、茎は稜形で節があり、

葉は灰緑色で線形状、花は花弁の縁が細裂した五弁の花で、花色は紅色が原色であるが、園芸品種には、藤色、桃色、白

〔枕草子〕
草の花は、なでしこ。唐のはさらなり、

大和のもいとめでたし。(六七段)

絵にかきおとりするもの、なでしこ。

(一一六段)

〔枕草子〕

草の花は、なでしこ。唐のはさらなり、大和のもいとめでたし。(六七段)

いみじう暑き昼中に、いかなるわざをせんと、扇の風もぬるし、氷水に手をひたし、もてさわぐほどに、こちたう赤き薄様を、唐撫子のいみじう咲きたるに結びつけて、とり入れたるこそ、書きつらんほどの暑さ、心ざしのほど浅からずおしはかれて、かつ使ひつるだにあかずおぼゆる扇もうち置かれぬれ。

(一九二段)



色などもある。初夏を飾る草花として親しまれている。

かきつばた

杜若

カキツバタ(あやめ科)

〔枕草子〕
 めで、たきもの……
 ……花も糸も紙もすべて、なにもなにも、むらさきなるものはめでたくこそあれ。むらさきの花の中には、かきつばたぞすこしにくき。
 (八八段)

〔徒然草〕
 家いへにありたき木は……
 ……山吹・藤・杜若……(二三九段)

枕草子の「めでたきもの」(八八段)は、目出度いもの対象として、具体的な事柄をあげているが、この段の中心は、六位の藏人くらうとに対する観察である。その中で「なにもなにも、むらさきなるものはめでたくこそあれ」といって、ただし紫色の花の中では、カキツバタは少しばかり感心しないといっているのは、一体どういうことか。この花は「草の花は」(六七段)の中にも数えられていない。

カキツバタは水湿地に自生もあるが、今は多く池辺などに栽培されている多年草で、群生する。初夏に茎頭に濃紫色の花を開く。アヤメ、カキツバタ、ハナシヨウブは、日本産のアヤメ科の草花として世界に知られているものである。今は園芸品に花が白色のシロカキツバタもある。





かきつばた



ゆふかほ

ゆふかほ

夕顔

ユウガオ(うり科)

「枕草子の「草の花は」(六七段)に、この実の何故またこんなに大きく生れたのかしら、とはいうものの、やはり「夕顔」という名だけは興味がふかい、といっているのは、夕べに咲くというこの花の習性が、その名に自然だからであろう。

徒然草「折節の移りかはるこそ」(一九段)の、六月という季節の描写も、短にしてその季節をよく写している。「あやしき家に夕顔の白く見えて」というのも、『源氏物語』の「夕顔」の巻を思わせるものがある。

このユウガオは、もと熱帯アジアの産で、この名は平安文学に初めてみえるから、この頃に渡来したものであろう。畑や人家に栽培されている一年生の蔓性植物で、ユウガオの名は、夕方に咲く花に基づいたものである。夕方に、ほのぼのと咲く白い花は、いかにも詩的である。この果実は煮て食用とするほか、果肉をひも状に細く切って乾燥し、カンピョウを作る。

あさがほ

朝顔

アサガオ(ひるがほ科)

枕草子の「七月ばかりいみじうあつければ」(三六段)は、残暑の有明から、日の射し出ずる頃までの、ある女性の一部屋を描写したもので、枕草子の中でも最も感覚的な描写の一つとされている。その中にアサガオの花も艶に描き出されている。

また、徒然草の「家にありたき木は」(一三九段)は、枕草子の筆をまねて、数々の木や草の名を数えたものと思われるものであるが、そこに吉田兼好の趣味性が強く現れている。

アサガオは、朝に咲く美しい花という意味で、もとは熱帯アジアの産といわれているが、原産地は明らかでない。しか

〔枕草子〕
草の花は……

夕顔は、花のかたちも朝顔に似て、いひつづけたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、実のありさまこそ、いとくちをしけれ。などさはた生ひ出でけん。ぬかづきなどいふものやうにだにあれかし。されど、なほ夕顔といふ名ばかりはをかし。

(六七段)

〔枕草子〕

七月ばかりいみじうあつければ……

朝顔の露おちぬさきに文かかむと、道の程も心もとなく、「麻生の下草」など、くちずさみつつ、我がかたにいくに、格子のあがりたれば、御簾のそばをいささかひきあげて見るに、おきていぬらん人もをかしう、露もあはれなるにや、しほしみたてれば、枕がみのかたに、柵にむらさきの紙はりたる扇、ひろごりながらある。

(三六段)

〔徒然草〕

家いへにありたき木は……

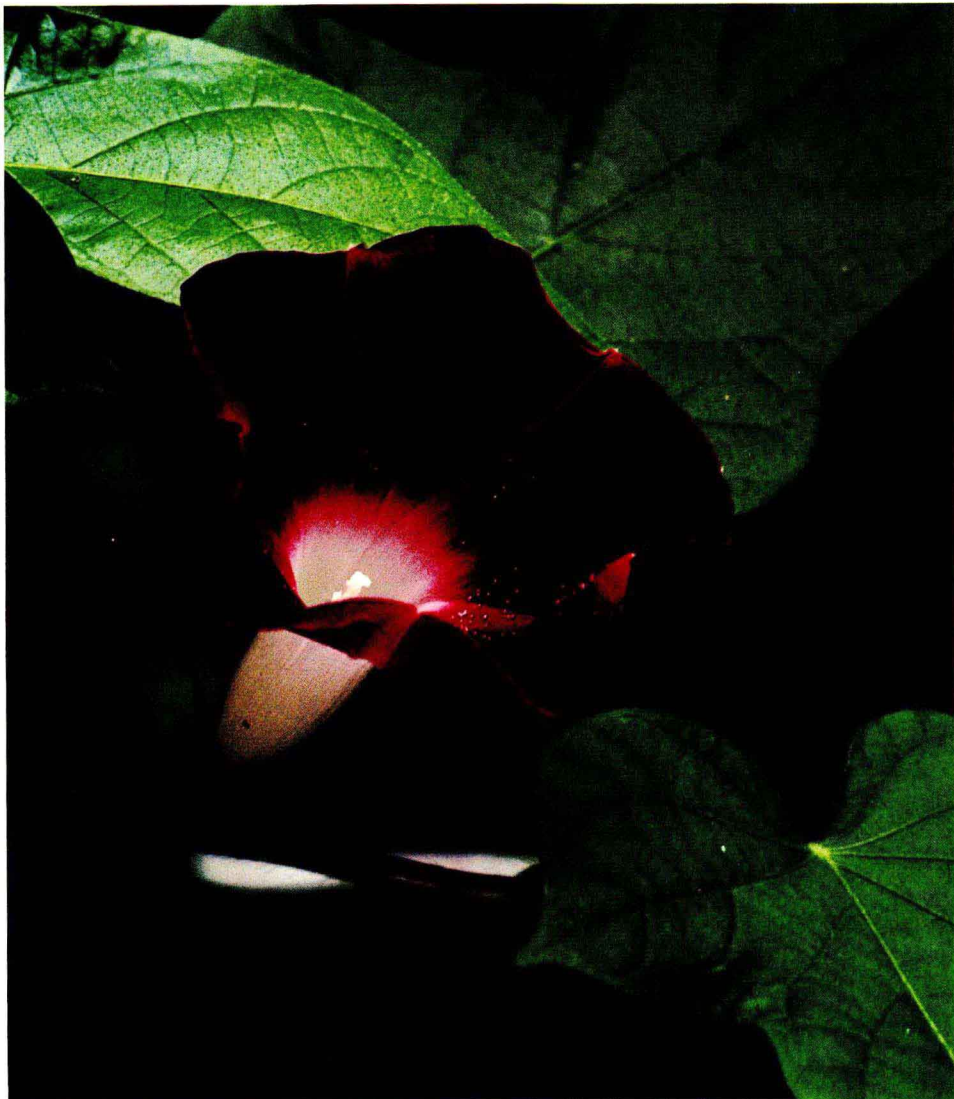
草は、山吹・藤・杜若つばき・撫子……つた

・くず・朝顔、いづれもいと高からず、

さ、やかなる牆かべに、繁さかからぬ、よし。

(二二九段)

し、中国では今から一五〇〇年前の宋の時代に、この種子を薬用に供したといい、日本へも初めは薬用として渡来したもののらしい。『古今集』にケニゴシの名がみえるから平安初期の渡来と思われる。しかし花が美しいので観賞花となり、徳川時代には多くの品種が生れ、今は大別して、大輪アサガオと変化アサガオとに分類している。



あさかほ

はちす 蓮

ハス(すいれん科)

〔枕草子〕
草は……
蓮葉、よろづの草よりもすぐれてめでたし。妙法蓮華のたとひにも、花は仏にたてまつり、実は数珠につらぬき、念仏して往生極楽の縁とすればよ。また、花なき頃、みどりなる池の水に紅に咲きたるも、いとをかし。
(六六段)

〔徒然草〕
家におりたき木は……
……池には蓮。
(二三九段)

〔枕草子〕
草は……

……山菅。日かげ。山藍。浜木綿。

(六六段)

ハスは仏教の盛んになるにつれ、仏教と結ばれるようになり、枕草子「草は」(六六段)もそれを示している。「心地よげなるもの」(八〇段)にも「池の蓮、村雨にあひたる」といひ、「うつくしきもの」(一一一段)に、「蓮の浮葉のいとちひさきを、池よりとりあげたる」といつているのも、いかにも清少納言らしい。また、徒然草「家におりたき木は」(二三九段)にも、池にはハスをあげている。

このハスは、池沼・水田などに植えられ、花は夏に咲いて芳香を放つ。花も美しいが、円くて大きい葉、また秋から冬にかけての枯れ姿も、古来文学の題材になっている。古名はハチスという。

はまゆふ

浜木綿

ハマユウ
一名ハマオモト

(ひがんばん科)

ハマユウは関東南部から以南、以西の砂地に生える大形の常緑多年生草本で、茎とみているのは、植物学上からいうと偽茎である。直立し高さ五〇センチ位になる。この偽茎の上部から多数の大きな葉を出し、葉幅が広く、葉質は厚くて滑らかで美しい。昔は大臣の大饗たいきょうの時には、この葉をもつて雉の料理を包む慣わしがあったという。花は夏に葉の間から花茎をだして、先に白色の花が傘形に咲き、よい香りがする。



